

白馬村における八方尾根スキー場周辺の 宿泊施設の現状とその課題

初等教育教員養成課程 社会選修 深谷 圭太

日本におけるスキーは100年前に軍隊の移動手段としてオーストリアから伝来した。その後、積雪地域において、新たな雪の利用法としてスキーは市民に浸透していった。第二次世界大戦後、日本は著しい経済成長を遂げ、国民には余暇と金銭的なゆとりができた。そして、余暇の過ごし方として、居住地を離れて余暇を楽しむレジャーという考え方が生まれた。スキーはレジャースポーツの代表として積雪地域以外の人々にも浸透し、全国にスキー場が開発されるようになった。これまで農村であったスキー場周辺の集落は、スキー場開発によって都市部から大量に押し寄せるスキー客を泊めるための民宿・旅館の建ち並ぶ宿泊業の集落へと一変した。しかし、近年レジャーの多様化、長引く不景気のためスキー人口の減少が続き、スキー場を訪れる客数は最盛期の半分以下に落ち込んでいる。スキー客減少はスキー場とともに発展してきた周辺集落にも影響を与えている。

本論文では長野県白馬村八方尾根スキー場周辺の集落を事例として取り上げ、スキー場の開発とともに発展した宿泊業の集落ごとの現状を宿泊施設へのアンケート調査・聞き取り調査から明らかにした。その上で、現状からみえてくる宿泊業および地域全体の課題を明らかにすることを目的とした。

八方尾根スキー場周辺の集落における宿泊業は開業時期毎に戦後の第1次スキーブーム、1950～60年代の八方・八方口地区での宿泊客受け入れの限界期、高度経済成長期からバブル経済にかけての第2次スキーブームの3つに分けることができる。そして、開業時期の違いが民宿・旅館・ペンションといった宿泊形態の異なる施設を登場させた。開業時期の違いは地区ごとの特性を生みだしていると考えられる。こうした地区ごとの特性を明らかにするなかで、対象地域の宿泊施設のおかれている現状と課題を

明らかにすることができた。

まず、対象地域の現状は以下のとおりである。

対象地域での宿泊業は戦後から 1990 年代前半のスキー客の急増によって発展してきた。しかし、1990 年代後半のスキー客の激減により十分な収入が得られず、後継者も見つからない施設が多く、スキー客の減少とともに衰退傾向にあるということが明らかとなった。そうしたなかで、スキー客の減少による経営難を何とか打開しようという動きもある。当地域の宿泊業はスキー客に支えられ過ぎていたといっても過言ではなく、スキーシーズン以外の宿泊客の獲得が必要となっている。そのため、宿泊業の衰退の打撃を最初に受けやすい小規模な宿泊施設では小規模だからできる個々の客のニーズに応じたサービスによって、スキーシーズン以外の宿泊客に加え、常連客の獲得に取り組んでいた。

次に、今後の課題としては以下のことが明らかとなった。

第一は新幹線・高速道路など高速交通網の整備などの交通の利便性の向上によって、白馬への日帰り観光客が益々増加することが予想されることである。こうした状況の中で、白馬を訪れた観光客に宿泊してもらうには観光客が泊まってみたいと思えるような魅力ある宿づくりが必要である。魅力ある宿づくりの参考となるのが、現状でも指摘したオリジナリティーのあるサービスを提供し、他の施設との差別化を行っている宿の取り組みである。スキー目的の宿泊客数の見込めない現在、各施設はスキー以外の宿泊客を増やす努力をしていかなければならない。

第二は 1998 年の長野オリンピックで海外にも知られるようになったこともあり、近年、白馬を訪れる外国人観光客が年々増加していることである。しかし、外国人観光客は言葉、料理の味、生活習慣の違いを心配して、外国人が経営する施設へ宿泊する傾向にあった。長引く不景気とレジャーの多様化で国内からの需要に期待がもてない状況において、外国人観光客が多く訪れていることは低迷する経済や宿泊業を活性化させるための残された数少ない機会である。この機会を無駄にしないために、外国人観光客が古くからある民宿・旅館に宿泊できるような環境整備が必要である。また、スキーと温泉、そして日本文化にあふれる民宿・旅館のある白馬とし

て、国内だけでなく海外にも宣伝していくことが必要である。

以上が今後の課題であり、これらの課題を乗り越えていくには宿泊施設だけでなく役場、観光協会といった行政が協力し合う必要があるという結論に至った。